

新刊紹介

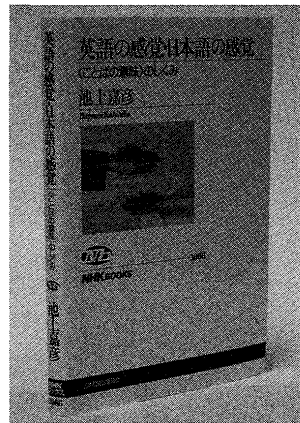
池上嘉彦著

『英語の感覚・日本語の感覚』

瀬戸賢一

池上嘉彦氏の近著『英語の感覚・日本語の感覚』は、日英比較を主眼とする優れた意味論入門書である。伝統的問題と新しい認知的知見が融合されて意味論の重要項目がコンパクトにまとめられ、語句と文の意味論から語用論を経てテキスト言語学の領域までがカバーされている。さらに、独創的な言語類型論的視点からの日英比較が行われ、かつ、言語を超えた記号論の分野にまで論が及ぶ。扱われる範囲の広さと個別的事例への目配りが行き届いた好著である。

池上氏のテキスト言語学への関心は、初期の著作のひとつ『英詩の文法』（一九六七年、研究社）にすでに明らかである。『意味論』（一九七五年、大修館書店）においても、構造主義的意味分析の手法に軸足が置かれてはいるが、その第8章「テキストにおける意味構造」では文を超えるま



2006年8月30日発行
日本放送出版協会
B6判 256頁
定価970円(本体)

りが取り上げられている。ロシアフォルマリズムやプラグ学派の研究に対する関心、プロップの『民話の形態学』やヤコブソンの一連の研究に対する注目、レヴィ・ストロースの神話研究への言

及などがすでにそこに見られる。池上氏の研究には人間の意味活動(あるいは記号活動)を背後で突き動かすものへのまなざしがしばしば感じられるが、それは広い意味での人間の言語活動をトータルに見届けようという思いがあるからなのだろう。このことは記号論研究とも強く結びつく。氏は

エーコの『記号論』(一九八〇年、岩波書店、全二巻)の翻訳者であるだけでなく、『ことばの詩学』(一九八二年、岩波書店)、『詩学と文化記号論』(一九八三年、講談社)、『記号論への招待』(一九八四年、岩波書店)などの著作がある時期に矢継ぎ早に出版された。これらも、テキストや文化に対する強

い関心が背景にあってのことである。たとえば、『ことばの詩学』ではなぞなぞ、ことわざ、わらべうたのような比較的小さなテキストから民話のようなやや大きなテキストまでが取り上げられる。その民話も、かちかち山や猿蟹合戦などと並んでアメリカ・インディアンの民話も俎上に載せられる。これは、氏がダンダスの『民話の構造』(一九八〇年、大修館書店)の翻訳者でもあることからも納得できる。時流はときに気まぐれであり、底の浅い日本の記号論はその後ほどなく頓挫した格好であるが、今回の氏の著作の端々に記号論的分析を見つけることはむずかしくない。

さらに、池上氏の研究を追えば、やや時間が前後するが、『する』と『なる』の『言語学』(一九八一年、大修館書店)がある。独創性が高く、この書を中心とした一連の研究によって氏は世界の第一線に立った。同じ論点は、のちに『日本語論への招待』(二〇〇〇年、講談社)でもうひとつわり大きく論じられる。本書の中でもその要点がわかりやすく解説されている。

では内容を順に検討しよう。第1章「ことばと意味」は本書全体の基調を整える。ことばは、形と意味が一体となったものであるが、つねに一対一対応ではないことが、誤用、嘘、比喩、婉曲法、皮肉、PC (politically correct) などの具体例に基

づいて解説される。これは意味論の導入としてエニークであり、池上氏の幅広い関心によってはじめて可能となる。ひとつひとつのトピックは、それだけで章を構成できる内容を持つ。いや、かつてのヴァインリヒの『その言語学』やフレエの『誤用の文法』を思い起こせば、それだけで一冊の書ができるテーマでもある。個々のテーマについてのより詳しい記述と解説を今後に期待したい。國弘正雄の『アメリカ英語の婉曲語法』が出版されてからだけでも、すでに四半世紀以上も経過しているのだから。

第2章「語彙の中の意味関係」では、同義語と類義語の区別、反意語のタイプ、意味の包摂性(上下関係、あるいは類と種の関係)などの伝統的意味論の重要概念が日英語の具体例に基づいて的確に叙述される。これらは、すべて多義性の問題に行き着く。多義語の記述はいま認知言語学の主要なテーマのひとつであり、池上氏はレイコフの『認知意味論』の訳者の一人でもある。英語の多義語の具体的な記述はすでに氏の『意味論』にもいくつか見られたが、この分野でも二世紀の視点からの重点的な著述がさらに望まれる。

第3章「文法と意味」は、文法形式と意味との緊密な対応を探る。内容的には『英文法』を考える(一九九一年、筑摩書房)と重複する部分がある。

少なくないが、本書での記述はより整理が行き届いている。この主題を展開すれば広い意味での「構文の意味」につながり、現在の構文文法に対する関心と接続する。章末では接続詞 that の出入りの問題が取り上げられて、ポリンジャーの名著『意味と形』からの一節の引用が光る。

第4章「意味とコンテキスト」は、文を超えてテキストを扱い、さまざまな民話の構造分析も見られる。また、グライスの「協同の原則」やリーチの「丁寧さの原則」も紹介される。テキスト性をどのように規定すればよいのかという問題に取り組むために、いくつかの道具立てが具体例とともに論じられるが、〈結束〉(cohesion)、〈結束構造〉(cohesion)、〈結束性〉(coherence) の用語は初心者にはやや紛らわしいのもうひとつ工夫ほしい。

第5章「意味の変化のダイナミズム」は、意味の歴史的变化と共時的多義の問題がテーマである。メタファーやメトニミーなどについて縦横に論じられる。ヤコブソンから最近の認知研究までが視野におさめられていることが十分に感じられる。また、メトニミーからのシネクドキの独立の可能性についても示唆されている(一四五頁)。

第6章「言語の普遍性と相対性」は本書の白眉である。研究者もこの章は注意深く読み進めたい。

たとえば、自分の子どもの数について、I have two children と「(私には)子どもが2人います」のような簡単な日英表現のペアが二〇題提示され、それに基づいて論述が進む。「する」と「なる」との対比、〈HAVE〉言語と〈BE〉言語の対照が下敷きになっていることは明らかである。得るところ大であろう。

第7章「ことばの限界を越えて」は、伝統的な詩学やレトリックの領域に踏み込み、ワーズワースやコウルリッジの詩論ないし文芸論から漱石の文学論まで、「ことばの詩的機能」を巡るあれこれが検討される。日本語との比較では、俳句とその英訳の問題点にも論が及ぶ。この章も初学者のみに委ねるのはもったいない。

総じて感じられるのは、池上氏の若々しい精神であり、氏の円熟したゆとりに基づく控えめな美学である。もちろん、明晰で品位ある文章も豊かな味わいの一部である。幅広く読者に薦めたい。なお、教科書としても価値ある一冊であることは筆者がすでに実証している。

(せと けんいち 大阪市立大学教授)